

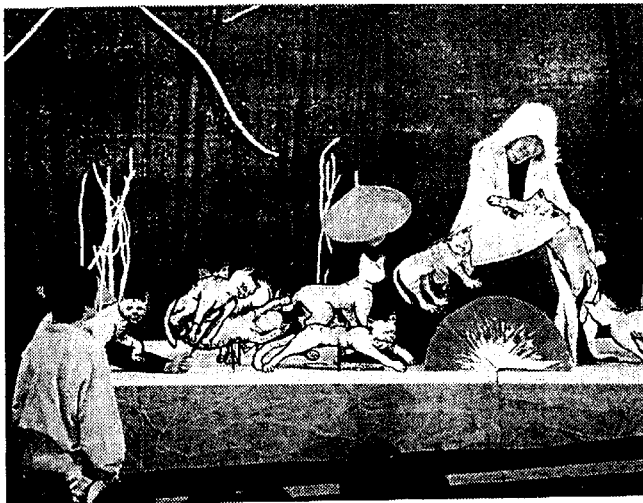
# オペレッタで「生」考える

## 「死」のバーチャル化に危機感

### 新宿の子どもにも上演1500回

自分の命は自分だけのものではないんだよ。そんなメッセージを込めて、オペレッタ劇団ともしび(新宿区)が、オペレッタ「いのちのバトン」の上演を20年近く続けている。上演回数は約1500回に上る。親が子を、子が親を殺すというような事件が相次ぐ中、藤沢義男代表は「命の意味、生きるこの意味を問い続けたい」と話す。

(松浦祐子)



「いのちのバトン」の一場面。直樹(左)は死んだ猫やいのちの守り神「山のババサ」(右)との出会いを通じて、いのちについて学ぶ(オペレッタ劇団ともしび提供)

上演のきっかけは二十数年前、藤沢さんが自身の子どもを通う小学校のPTA会長になり、ホームルームで話をする機会を得たことだった。

当時、いじめによる自殺が社会問題になっていった。「死に急ぐ子どもを何とかしなければならぬ」との思いから、藤沢さんは教壇に立ち、命の大切さを語ったが、子どもたちの反応はいま一つ。教室はシーンとしたままだった。

唯一、盛り上がったのは、霊界や三途の川の話をした時だった。子どもたちから「一度、あの世に行ってみたい」という声が上がった。

子どもたちは、漫画やゲームなどで三途の川という言葉を知っていた。だが、死の意味を理解せず、「あの世とこの世は行き来できる」と信じている子どももいた。生きることがバーチャル(仮想)になりつつあると、藤沢さんの危機感は強まった。

子どもたちに、生と死の意味を考えてもらうにはどうしたら良いか。当時、同劇団で制作を担当していた藤沢さんの答えは、オペレッタを作ることだった。

同劇団は、老舗の歌声

【あらすじ】主人公の小学6年生の直樹は愛猫を突然の死で失う。悲しみの中、新潟の祖父の家へ出かけ、雪深い裏山を歩いているうちに、がけから転落し、あの世に入り込んでしまう。そこで病気で死んだ猫んだ先が、交通事故で死んだ父、江戸時代に生きて命や死について学んでいく。

あの世で父や先祖から学ぶ

喫茶の流れをくみ、庶民の風刺性とユーモアを大切にしていたオペレッタ作りに定評があった。

原作には、松谷みよ子作の「死の国からのバトン」を選んだ。命や生きること個人的事業などではなく、先祖から自分、さらに子孫へと受け継がれるバトンとしてとらえている点に共感した。

演出は、多数の児童劇団で演出を手がける関矢幸雄さんが担当し、1987年に初演を迎えた。現代的なシンセイザーと和太鼓で奏でられる音楽も魅力だ。

以来、小中学校を中心に公演が続いている。観賞した児童からは「わたしもばとんタッチされてるからがんばるよ」「わたしは今、わたしのお母さんがバトンをわたしてくるんですね」などの感想が寄せられているという。

藤沢さんは「重い内容のオペレッタだが、子どもなりに受け止めてくれる。これからも、命のバトンをつなぐ意味を伝えていきたい」と話している。